魔王様の大冒険

櫻井結乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王様の大冒険

【Nコード】

N6218Y

【作者名】

櫻井結乃

【あらすじ】

大魔王サタン。人々から恐れられる存在。

のはずだったが、いつまで経っても勇者は城へと乗り込んでほこなかつた。

暇を持て余したサタン。中間管理職のルシファーも全然構ってほくれず、ついにはしびれを切らしてしまった。
そんなサタンの取った行動は……？

プロローグ

「なあなあ、中ボスなルシファー君……俺さあ、気付いたんだけどさあ……超暇だわ」

世間一般的には「大魔王」と呼ばれている俺は、クルクルと動物の生き血が入ったグラスを回しながら、魔王城の一室でゴージャスな玉座に座っていた。

胸にかかるくらいの長さをした美しい銀髪。紅いマントに、動物の骨を細工した装飾品。大きな漆黒の翼に2本の角。“いかにも”魔王という装いである。いや、実際魔王なだけだな。

そんな俺の仕事は、城に乗り込んできた愚かな勇者共を一掃すること……だったのだが。

「勇者、全然こねーじゃん」

サタンは生き血を一気に飲み干し、タンツ！ とテーブルに八つ当たりするかのようにはグラスを置く。

「魔王の城にすら辿り着けないとか……つまらないと思わないかね、中ボスなルシファー君」

「その呼び方やめてください」

中間管理職兼中ボスのルシファーは、蒼いマントを翻し不機嫌そうに部屋を出て行ってしまった。

「つれないな」

はあ、と溜め息をつく……俺は人間界を監視するモニターを覗

き込んだ。

「どいつもこいつも弱っちいな……最初のボスでさえ突破出来てる奴少ないじゃねえかよ。俺いつになつたら勇者と戦えんの？」

苛々しつつ、各地の勇者の様子を観察していると、俺の目に留まった一人の勇者がいた。

「……こいつ、可愛いな」

シルビア「ライトネス。Level 8。職業「かけだし勇者」
さらさらな赤い長髪、長い睫毛に大きな瞳。ジャケットの下に胸元の開いた黒のドレスを纏っている。胸は小さめだが、なかなか良い形をしていた。

「俺、どうせならこういう可愛い子と戦いてえなく、んで、どさくさに紛れて乳揉んだり尻触ったりあわよくばアレをこうしてソレをああして……」

「サタン様」

「……あ？」

俺の桃色な妄想はルシファアの言葉によって遮られた。憤慨した俺はプルプル震えながらルシファアを睨んだ。

「東イリアス地方の魔物が減ってきているようです。召喚してください
さい」

「くそっ……俺は召喚術師じゃなくて大魔王だってんだよ」

この世界の設定上、魔物を増やすことが出来るのは所謂ラスボスの俺だけなのである。

「大体魔物を増やしたら余計勇者来てくれなくなるじゃん、いいよもう増やさなくて……」

「早く任務を遂行してください」

表情ひとつ変えずにルシファーはぴしゃりとそう言い放った。つくづくつまらない男である。

「ったく、しょうがねえなあ……」

俺は禍々しい髑髏の装飾をあしらった杖で魔方陣を描くと、ゴニョゴニョと呪文を唱えた。

「出ですよ！ 我が下部達！」

右腕を振り上げると、魔物が魔方陣の中心からわらわらと沸きだす。

「……出たよ、魔物」

最初こそ決めポーズ決めて「今日の召喚は一段とかつこよく決まったぜ！」とか言ってた俺も最近はずっかり飽きてこの通りである。

「ありがとうございます。では、私は魔物を東イリアス地方に送り届けて参ります」

「へーい、気をつけてなー」

……本当につまらない毎日だ。

ラスボスって響きに憧れて頑張ってるこの地位に就いたのに勇者が来なきゃなんの意味もない。

転職しようかなあ……村人あたり……。
絶望の眼差しで見つめた先に映ったモニターの中で、シルビアの笑顔が光っている。

「……そうだ、いいこと思いついたぞ」

俺の濁った瞳はみるみるうちに輝きを取り戻し、悪戯っぽく微笑みながら人間界へと続く階段へと向かう。

「俺、魔王だったことは隠しつつシルビアの仲間になって、この城まで一緒に冒険してあげればいいじゃないか……!!」

……こうして、異色の大魔王の大冒険が始まったのである。

勿論、「中ボス」のルシファーなんかは粉碎できる力を持っていた。「ま、いつか。うっさいのいなくなったし。あとで誰か回復呪文かけてくれるだろ」

俺はくるりと向きを変え、改めてルンルンと階段を降って行った。

……人間界。緑で溢れていて妙に空気が澄んでいる場所。
俺達魔族にとっては心底居心地が悪い。

「シルビアちゃんは確か……エイビスの町の武器屋で剣を物色していたはずだったな」

俺の下半身の剣じゃだめかな？ とか桃色の妄想を膨らませて二ヤけつつ、俺はエイビスへと向かった。

エイビスは森のはずれにある小さな町だった。所謂、勇者たちの冒険がまだ序盤の頃に立ち寄る場所だ。

「おうおう、弱そうな奴等がたくさんいるぜ……ん？」

町人が俺を見てザワつき始めている。翼と角は隠しているもの、着ている洋服や禍々しい装備品の数々を見て異端と感じ取ったのだろつ。

「おい……あいつ、なんかおかしなオーラ放ってないか……？」

「まさか、魔族？」

「いやだあ、薄気味悪い」

そんな声がちらほらと耳に入った。おいおい、町到着後二分で正体がバレかかっているぞ。

「ごちっ

その時、町の子供が俺に向かって石を投げつけた。
え？ 何こいつ死ぬの？ 俺は思わずギロリとその子供を睨んだ。

「こいつ、大魔王だ！！」

突如、石を投げた子供が叫んだ。

え？ あれ？ 身バレした。早々に。なんで？

「ま、魔王ですって……！！」

「近寄らない方がいい」

「町から出ていけ！！」

町人達みんなして石を投げてきた。

でも、全然痛くない。石程度じゃダメージ受けないし。あ、でも怪しまれないように痛がるべきか？

「やめろ！」

俺と町人達の間割って入ってきた一人の女剣士。

「余所者だからってそんな扱いするのはやめろ！」

さらさらな赤い長髪、長い睫毛に大きな瞳。

「大丈夫か？」

胸は小ぶりだがなかなか良い形をしている。

俺の顔を覗き込むためにしゃがんだ瞬間、それはぷるりと揺れた。

「超大丈夫です！！」

俺は思わずその女剣士……改めシルビアの手の甲にキスをした。

まさかシルビアが助けしてくれるとは思わなかった。これが運命つてヤツか……！

「うわあああ！ 何すんだ変態！！！！」

思いつきり鳩尾をド突かれはしたものの、痛くない。むしろ気持ちいい。

「あ、ソレもつとやっていいです」

「うわあああああ！ 何こいつケロツとしててキモい！！！！」

後ずさるシルビア。町人達も変なことに関わるまいとさっさとどこかに行ってしまった。

「さっきは助けくれてありがとう。取りあえず俺と宿屋行かない？」

「い、行かない！ 私はこの先のヘイオスの沼地の大蛇退治に向かわなければならんだ……変態に構っている暇はない！」

「ああ〜！ あの大蛇ね！ 俺も仲間に入れてよ、大蛇退治！」

「……は？ 遊びではないのだぞ。素人が命を粗末にするな」

「えー。俺強いよ？ 超強いからさ。ほんとほんと」

「断る」

シルビアは俺に背を向けると一人でさっさと町を出て行ってしまった。

……確か、大蛇はLevel16のボスだったはずだ。Level18のシルビアじゃ敵いつこない。そこでだ。俺が救世主役をしよう。

大蛇VSシルビア シルビア苦戦 俺助ける サタン様かっこいい 共に宿屋へ ゴールイン

完璧じゃないか！

俺は紅いマントを勢いよく翻し、颯爽とシルビアの後を追ってへイオスの沼地へと向かった。

第2話 仲間

「……何故付いてくる？」

バレた。尾行開始わずか三分で即効シルビアにバレた。シルビアは眉間にしわを寄せて怪訝そうにこちらの様子を見ている。

「いやあ、俺って可愛い子がいるとついつい追いかけてきちゃうんだよなあ、本能的にさあ」

「……」

シルビアは迷惑そうにしっしっとまるで動物かなんかを追い払うかのような仕草をした。何それ犬扱い？ そういうの嫌いじゃないぜ？

「……」

「……」

「……いい加減にしてくれないか？」

「え？ なにが？」

「お前、大蛇がどれだけ危険かわかっているのか？」

「勿論！ だって俺が呼んだんだし……」

「呼んだ、だと？」

「あ、いや……こつちの話し」

「お前……何者なんだ？」

シルビアは更に怪訝そうな顔になった。いけないいけない、口を滑らせないようにしなくちゃな。

「俺ねえ、魔法使いやってるんだわ。前まで凄腕の勇者に雇われて

ただけどさ、今は訳あって一人旅してる」

「魔法使い……だと？」

「あ、信じてない？ じゃあちよつとだけ魔法を見せてあげるよ」

俺が指をパチンと鳴らすと近くににあった森一帯が轟音と共にすべ
て吹き飛んだ。土埃が辺り一面に舞う。

シルビアは大きな瞳を更に大きくして、口をパクパクさせていた。

「どう？ 俺強いだろ？」

「バカかお前は！？ 森が吹っ飛んでしまったじゃないか！！」

シルビアは思わず俺の後頭部をグーでガツンと殴り付けた。なか
なか暴力的なお嬢ちゃんだ……良い拳してやがる。

が、防御力的な問題で何もかもが気持ち良く感じてしまう。

ああ、もっとやってくれ。

「な！ お前さっきから痛みというものを感じているのか？」

「えっ？ あ、ああ、俺さあ、あ、アレ……アレなんだわ！ ドム
なんだわ！」

「や、やっぱり変態なのか……っ！！」

シルビアは汚物を見るような目でこっちを見ている。

俺、そういう目嫌いじゃねえわ。

……あれ？ さっきは咄嗟にドムとか言っちゃまったが俺ってもし
かしてマジで……

「とにかく、私はお前と共に行動する気はない」

「そうなの？ 俺はシルビアちゃんと行動する気満々なんだけどな

あゝ」

「……っ！ お前、何故私の名を知っている！？」

……俺は一体何度目の墓穴を掘っちまったんだろうか。

シルビアのサタンを見る目は疑いから怯えへと変わっていた。

……うーむ、流石の魔王様でももう言い訳が出てこねえぞ。

「お前、何かを隠しているな？」

「おいおい、DMってことまで暴露させておいてまだ俺のこと疑って……」

「まさかとは思つが、さっきの子供が言った通りお前本当は魔王なのではないだろうか？」

おい。

人間界で大人気のアニメ「名探偵コナン」でもまだ主人公の招待バテてねえっつーのに、いくらなんでもこの展開俺の正体バレンの早過ぎだろう？

じわりと額に冷や汗が滲みだした。

「……ふっ、まさかな。こんな変態が私達勇者の宿敵はずがない」

シルビアは自嘲しつつ、そう言った。

セーフだ。

自己解決してくれたぞ。俺、変態でよかった。

「じゃあな。もう会うこともなかるう……付いてくるなよ？」

シルビアはギロリと俺を睨み付け、くるりと方向を変えて足早に

林の中へと消えた。

つれないなあ。ルシファーみたいにつれないぜ。

俺は仕方なくシルビアとは別行動でハイオスの沼地へと向かった。

沼地ではヘドロの魔物や小さな虫やへびの魔物で溢れていた。そいつらの亡骸がそこかしこに転がっている。きっとシルビアが戦闘した痕跡だろう。剣の腕はLevel 8にしてはなかなかのようだ。

「確か、このでけえ木を潜った辺りにボス配置したはずだったな……」

その時、けたたましい轟音が沼地の淀んだ空気を激しく振動させた。きつと大蛇が移動するときの音だろう。それほどまでにヤツはでかいのだ。

「もう始まつてるのか。シルビアちゃんは無事かな？」

大蛇“キングスネーク”は、シルビアを胴体でぐるぐる巻きにして、グイグイと締め上げている最中だった。チロチロとした舌先が今にも鼻先に触れそうになっている。

シルビアは抵抗しようと手に持った剣を振りかざすものの、抵抗も虚しく剣は手の平から地面へとするりと抜け落ちてしまった。予想通り苦戦中つてところか。

「……………ぐうっ！」

それでも抵抗しようと、足をばたつかせる。

もう少しアングルさえ良ければスカートの隙間からパンツが見えそうだ……………！

俺はごくりと生唾を飲み込んだ。そして、大蛇にこっそりとアイ

コンタクトを送る。大蛇はコクリと頷くと、シルビアの足に巻き付き、逆さ釣りにしてみせた。

「水玉！」

「ちよ、へ、変態！ 見てないで助けろっ」

「OK、OK。ただし、条件がある」

「な、なんだ？」

「俺をパーティーに加えてくれ」

「く……っ！ 仕方ない……加えてやるから手を貸してくれ！」

「よшきた！！ 超貸す！！！ どっせえええい！！！！！」

両手を振り上げると沼地一帯に閃光が走り、物凄い爆発音が響き渡った。辺り一面に煙りや埃が舞い上がり、たんぱく質の焼け焦げる独特の嫌な臭いが漂う。

「な……こ、今度は沼地ごと吹き飛んだぞ！？ お前、一体どんな魔法使ったんだ！？」

「言ったじゃん。俺強いよって」

俺は髪をかき上げ、ふふんと自慢げに笑って見せた。

そして、シルビアはそんな俺の尻を思いつき蹴り上げる。

「無駄なものまで破壊するなど言っているんだ！！ 罪のない動物達まで巻き込んで……！！」

シルビアは涙ぐみながら力説する。少々乱暴者のようだが、心は優しいようだ。これでこそ俺の嫁になる女である……！！

「すまない、君を守ろうと思ったたら……つい、加減というものを忘れてしまった……」

「御託はいい。気色悪いやめろ」

シルビアは顔色ひとつ変えずにぴしゃりと言いつつ放った。

「次また無駄に破壊行為を行ったらお前をパーティから即はずすからな」

「ってことは、俺を仲間って認めてくれたんだね……！？では、さっそくよろしくねのキスを……」

ぐしゃああっ！

シルビアは思いつ切り俺の顔を殴った。しかも、グーでだ。痛みは感じないものの変な音がした。

この子……多分剣より拳の方がいい線いってる。

「さっさと次のダンジョン目指すぞ、変態」

……こうして、かけだし勇者と変態魔王の奇妙な二人旅が始まったのであった。

第3話 双頭獣

「ねえねえ、まだ戦うの？」

俺は木陰に座り込み、頬杖を付きながらフィールドの魔物と必死に戦うシルビアを眺めていた。避けて通ればいいものを……シルビアは片っ端から雑魚敵に勝負を挑んでいる。

「しょうがないだろう、Level上げをしつかりやっておかないと強敵に敵わないから……お前もそんな所に座ってないで戦え！」
「はいはい」

俺はすつと立ち上がりその辺徘徊していたオオカミのような獣系の魔物に向かって拳を振り上げた。その瞬間魔物は踵を返し、全速力で逃げ出して行った。

「んだよ、なつさけないな」
「……お前、一体Levelいくつなんだ？」
「それはねえ……ヒ・ミ・ツ」

ウインク飛ばして語尾にハート付けるような話し方したのが気に障ったのか、シルビアはこつちを思いつ切り睨んだ。……でも、言えねえよ。Level100とか言えねえよ。

その時、ヒュン！ と風を切る音が聞こえた。次の瞬間、キャツとシルビアの短い悲鳴が響き、頬に切り傷が一直線に出来た。

カマイタチか！？

辺りを見渡すと鳥系の魔物が上空からこつちの様子を窺っていた。

「大丈夫か？」

「あ、ああ……私としたことが油断してしまった」

シルビアは頬から出た血液を手の甲で拭い、剣を鞘から抜き、スツと腰を落として構える。

ウィンドブレード

“ 風 刃 ”

勢いよく剣先が上空に向かい弧を描き、風の刃が魔物に向かって飛んでいく。それは見事に命中し、魔物は地面へと落ちてきた。

その瞬間、シルビアは淡い光の柱に包まれる。どうやらLevel 1が9に上がったようだ。

「おめでとーっ！」

拍手しながらそう言うと、シルビアは照れているのか、目を伏せながら小さな声で「ありがとう」と呟いた。

「さて、そろそろ休憩といかないかな？ シルビアちゃんも疲れただろう」

「そうだな……最寄りのコルデスの街で少し休もう」

「……と、その前に」

俺はシルビアの頬に向かい手を伸ばす。白く柔らかい光が放たれ、頬にできた切り傷はスーッと消えてしまった。所謂“回復呪文”つてやつだ。

「可愛い顔に傷が残らないように、な」

「あ……す、すまない」

シルビアは再び目を伏せ、傷が消えたことを確認するかのよう

頬を手で擦っていた。

それから1時間ほど歩き、ようやくコルデスの街へと辿り着いた。

そこは、そこかしこに花が咲いていて、甘い香りで溢れていた。エイビスよりも栄えているようで、武器屋に防具屋、よろず屋にアケセサリーショップにカフェ……色々な店が並んでいる。民の数も多く、活気に満ちていた。

「噂には聞いていたが、綺麗な街だな」

シルビアはきよるきよると辺りを見渡し、目を丸くしている。

「私、武器屋で剣を見てくる」

「え、あ……ちょっとシルビアちゃ……」

話しが終わらないうちにシルビアはさっさと人混みの中へと消えてしまった。迷子にならなければいいが……。

しかし、年頃の女子が真っ先に武器屋とは……でも、それがシルビアちゃんらしいのかな。

「さーて、俺はどうしようかな」

大きく伸びをして辺りを見渡す。近くに咲いていた大きな紫色の花から漂う芳香が俺の鼻孔を刺激する。花の香りはどうも苦手だ……。とりあえず、建物の中に避難しよう。

俺は近くにあった建物の中に入った。

ドアを開けると、むわっと酒の匂いがして、男達の妙にでかい笑い声がこだまする。特に確認せずに入ってきてしまったが、ここは

どうやら酒場だったようだ。俺はとりあえず部屋の隅に置かれている酒樽の上に腰を下ろした。傍のテーブルに座って飲んでいる声の大きな男2人組の会話がイヤがおうにも耳に入る。

「アイオーンが魔物に殺られちゃったそうぞ」

「なんだって？ あの凄腕の剣士がか？」

「ああ、何やら双頭獣がこの辺に出没しているらしいんだ」

「そりゃあ、恐ろしいことだな。いつ死んでもいいように今のうちに酒をたらふく飲んでおかねえと」

「がっはっはっは！ それくらいしか俺達には楽しみなんてないしなあ！」

双頭獣？

サタンは耳を疑った。そんなもの召喚した覚えがなかったからだ。

“ 誰か俺以外に魔物を召喚できるヤツがいる ”

そんな考えがパツと脳裏を過る。変な胸騒ぎを感じて酒場を出ようとした瞬間、ちょうどドアから入ってきた男にトンとぶつかってしまった。

「おっと、すまな……」

「貴様！ どこ見て歩いてる！？」

「へっ？」

俺は身長2メートルはある大男に胸倉を掴まれてそのまま床に叩き付けられた。

え？ いったい何事？

痛みはなかったものの、あまりにも突然のことすぎてその場からしばらく動けず、目を頻りに瞬きさせた。

「アイツ、確かアイオンとよくつるんでた……」
「アイオンが死んで苛々してんだろ。おー、怖い怖い。目え合わせるんじゃねえぞ」

さっきまで賑わっていた酒場が一瞬にして静まり返る。

大男はウオツカを注文し、空いていた席にどしりと腰を下ろした。筋肉質の体にボロボロの黒いマントを纏い、手入れされていないであろう長い黒髪をかきあげ、苛々とした表情で目を伏せている。

背中にバカでかい大剣を装備しているところから、きつと剣士だろつ。

その時、大男が「何見てやがる」と言わんばかりにこつちを睨んだ。

俺は面倒な事に巻き込まれるのが嫌だったので、速攻で目を逸らし、そそくさと酒場を後にした。

第4話 雨

「さて、そろそろシルビアちゃんと合流するか……」

さつきまでの晴天が嘘だったかのように空はどんよりとしていて空気が重苦しい。そろそろ陽が落ちる時間帯ということもあり、辺りは闇に飲み込まれつつあった。

その時、ポツッと頬に滴が落ちる。とうとう雨が降り出してしまった。

俺は足早に武器屋へと向かった。

店内へと続くドアを開けると、シルビアが熱心に剣を見比べている姿が視界に入った。

「それ、欲しいの?」

「わわわわわ……!?!」

急に声を掛けられたシルビアは驚いてしまい、手に持っていた剣を落としそうになる。間一髪のところでなんとか剣を受け止めて、ホッとした表情を見せるや否や、ガツリと俺の後頭部を殴った。

「脅かすな……バカ!」

ざわざわとしていた店内だったが、シルビアの怒声に驚き静まり返り、客が一斉にシルビアに注目した。シルビアは恥ずかしそうに俯くと、小声でこう言った。

「何の用だ?」

「その剣欲しいのかなーって……買ってあげようか?」

「な……そうやって優しくしておいて後々変態な事を要求するんじゃないだろうな？」

「そんなのあたりまえじゃないか」

ゴツと鼻筋を殴られた。普通の人間だったら鼻血吹いて倒れてもおかしくない威力だ。

「うそうそ……いや、そうしたいのはほんとなんだけどさ。買ってあげるよ」

「い、いいのか？」

シルビアの瞳が期待の眼差しで大きく見開かれる。まだLevel 110にも満たないかけだし勇者じゃ、そんなに金も持っていないのだろう。エイビスで剣を物色していた時も「欲しい剣はあるが手が届きそうもない」という表情をしていたのを俺は見逃しはしなかった。

剣の会計を済まし、シルビアに手渡す。いつものムスっとした表情からは想像も出来ないような笑みが零れた。

「ありがとう！ ……そういえば、私はまだお前の名前を知らない。何と言うのだ？」

「サタン、だ」

「『サタン』か……魔王みたいな名前だな」

「そうだね。魔王みたいな名前だね」

一瞬冷や汗が額に滲んだが、さらりと流してみた。この展開にも概ね慣れた。

「改めてありがとう、サタン」

嬉しそうなシルビア。初めて見る少女のような彼女を見て、俺は満足そうに微笑んだ。

店を出ると外は大荒れだった。雨が降りしきり、雷の轟音が空気を揺るがす。

二人は宿屋へと泊まることになった。

「ようこそいらっしゃいました。お二人様ですね。どうぞ、こちらへ……」

フロントのフードを被った物腰が柔らかそうな白髪の老婆に部屋まで案内される。廊下は少しうす暗く、所々に置かれたランプの光が辺りをぼんやりと照らしている。

「お部屋はこちらになります。どうぞ、ごゆっくり」

女性はそういうと、何故か意味あり気に微笑み、フロントへと戻って行った。

案内された部屋はごんまりとしていて、ベッドはひとつしかなかった。小さなクローゼットに小さなテーブル、ダークブラウンの小さめのソファ。ベッドの向かいにある棚の上には古そうなテレビのモニターが置かれている。

テーブルの上にあるランタンの炎がゆらゆらと部屋の中をオレンジ色に染めていた。

ゾワゾワと胸騒ぎを感じる。俺は思わずモニターのスイッチを切った。

静まり返った部屋に雨音が響き渡る。

カーテンをそつと開き、窓の外を眺めた。豪雨のせいで辺りには霧が立ち込めていた。

「雨も久々だな……魔界では気象なんてものないからな」

その時、フツとまだ人間だった頃の記憶がフラッシュバックしたような気がした。俺は手の平を額に当て、苦痛に歪んだ表情を浮かべた。

(……久々の人間界にちょっと疲れたか?)

俺は自嘲するような薄笑いを浮かべ、ソファアの上で横になった。

第5話 襲撃

のしっ。

俺は身体の上に何か重みを感じて「うう……」と唸りながら目を覚ました。

辺りはまだ闇に包まれていることから夜中だろう。暗すぎて自分の上に乗っているのが何者なのかもよくわからない。

暫くして暗闇に慣れてきた瞳は、とんでもない光景を目にする。

「シ、シシ……シルビアちゃん!？」

俺の胸の上にちよこんとシルビアが乗っていた。口をポカンと開けてぐっすりと眠っているようだ……。普段着ている上着は身に付けておらず、黒のドレスからは今にも胸がはだけそうになっている。

これは夢か？

自分の顔を思いつ切り殴ってみる。痛い。流石俺の攻撃力だ。久々にダメージを受けた。

って、感心してる場合じゃねえ……!

ごくりと喉が波打った。

そろりそろりとシルビアの胸へと手を伸ばす。

「んっ……」

シルビアが小さく呻き、びっくりして手を離す。

「ううーん……」

がばっ。

突如、寝返りをうったかと思いきや、シルビアに頭を抱きかかえられた。胸に顔が圧迫される。ソレ特有の柔らかい感触は、俺の理性の鎖を外すのは容易かった。

俺はシルビアを抱きしめ、自分の唇とシルビアの唇を重ね合わせようとした。

「……………ん？」

ぱちりとそこでシルビアの瞳は開いた。

一頻り間を置いて、シルビアはニコツと微笑み俺の頬を引っ叩いた。

「何しようとしていた変態!？」

「え、や、だって、誘ってきたのはシルビアちゃんじゃ……………!」

シルビアが再び手を振り上げる。

「何を言っている？ そんな訳ないだろう!」

シルビアの腕がしなり、俺の頬に衝撃が走る。

一つわかったことは、シルビアの寝相はとんでもないって事だけだった。

「……………ん？」

「……………どうした、サタン？」

さっきまでふざけていた俺がいきなり顔をしかめたことに気付き、思わずシルビアが身構える。

「足音だ……それに、殺気を感じる」
「何だと？」

耳を澄まし、神経をとがらせる。

「……魔族、か？」

それは、確かに同族が発する気だった。俺は眉をひそめる。

魔族は魔王……つまりは、俺の命令無しには動かないはずだ。しかも、殺気立ちながら俺を襲おうとするなんて言語道断だった。

やっぱり、何かがおかしい。

「サ、サタン……くるぞ！」

けたたましい音とともに派手にドアが壊された。

中になだれ込んできたのは、なんとフロントにいた白髪の老婆だった。手には大きな鎌のようなものが握られている。

「な、この人……!?!？」

魔族の正体を見るや否や、シルビアは怯んでしまった。すかさず魔族は鎌を振るう。

「させるか!？」

直撃寸前というところで、鎌を素手で受け止めた。

「見た目に反して、ずいぶんと俊敏だなあ、婆さんよ！」

鎌を掴んだまま、そのまま魔族ごと薙ぎ払う。そして、バランスを崩した隙を狙って傍にあった椅子を思いっ切り投げ付けた。

「ぐあああつー!!」

「……俺を誰だと思ってやがる」

痛みで悶え苦しむ魔族を俺は右足で踏み付け、睨みつけた。

「誰の命令だ？ 誰が魔界で動いてやがる？」

その瞬間、魔族の身体から赤い光が放たれ、耳をつんざくような爆発音が響く。

俺は咄嗟にシルビアを抱きかかえて地に伏せた。魔族はどうやら魔法も使えるようだ。

「くっ……シルビアちゃん、大丈夫か？」

「あ、ああ……なんとか」

「あいつ……ちよつとおいたが過ぎるな」

パラパラと落ちてくる天井の破片を払いのけ、俺は右手を掲げた。

“ 地獄ヘルフレアの業火 ”

「ぐああああああつー!!」

突如、魔族の足元から野太い火柱が発生した。炎を浴びせられて魔族は苦悶の声を発する。

やがて、魔族の姿はゆっくりと滅び崩れ、灰のようになってさーっと消えていった。

「勝った……のか？」

シルビアがよろよろと腰を下ろす。魔族との戦闘は初めてだったのだろう。額を流れる汗がその恐怖を物語っている。

「もう大丈夫だよ。いきなりの戦闘で疲れただろう？ 俺がまた変なのこないように見張ってるから、少し休みなよ……って」

シルビアは既に床の上で寝息を立てていた。相当疲れていたのか、元から寝付きが相当いいのか……。

俺は彼女をそっとベッドの上まで運び、毛布を掛けた。

外からガヤガヤと声が聞こえる。これだけ大騒ぎしていたんだ……きっと民達も魔族騒動に気が付いたのだろう。

面倒なことにならないように、早朝にはこの街を出るか。双頭獣についても真相を確かめないといけないしな……。

俺はソファアーに深く腰掛け、ぼんやりとランタンの炎を眺めながら朝日が昇るのを待った。

第6話 無骨な剣士

早朝、俺達はコルデスの街を後にした。そして、双頭獣が暴れているラウルの森を目指す。

隣ではまだ眠たそうなシルビアがとぼとぼと元気なく歩いていた。今なら尻を触っても気付かれないんじゃないかってくらい脱力している。どうやら、朝に弱いようだ。

「大丈夫？ シルビアちゃん」

「……ああ……大丈夫だ……多分……」

その時、シルビアがつま先付近にあった大きな岩につまづき、ズザーッと盛大に転んだ。全然大丈夫じゃないこの子……！
俺はすぐさま彼女を助け起こした。

「シ、シルビアちゃん？」

驚いたことにシルビアはそのまま寝ていた。おいおい、冗談だろ。夜中の寝相といい、寝起きの悪さといい……つまりこれは、悪戯し放題ってことだな！

「取り込み中、すまない」

都合の良いように解釈し、まさにシルビアに悪戯しようとしたところで誰かに声を掛けられた。

……んだよ、これからって時に。不機嫌そうな眼差しで声の主に視線を向ける。

「あんたは……！」

声の主は、昨日酒場で俺を叩きつけた長髪マントな大男だった。

「昨日はすまなかった」

大男は深々と俺に向かって頭を下げた。昨日の無骨な態度とのあまりの差にどうすればいいかわからず、俺は言葉が出なかった。

「街で魔族を倒したと聞いた。貴殿はなかなか腕が立つようだな」「ま、まあな。魔法の腕にはちよいと自信はあるが……」

ガシツ。

「……へっ？」

突然大男に両手を握られる。ちょ、ちょっと待て。俺にはそんな趣味は……！

「なんと！ 魔法を使えると言うのか！ 貴殿にどうしても頼みたいことがあるのだが」

「だああっ！ わかった……わかったからその手を離せえいっ！！」

俺は大男の手を振りほどき、数歩下がって距離を置いた。

「双頭獣を倒すのを助太刀して欲しいのだ」

「双頭獣だって？ それなら好都合だ」

俺が頷くのを見て、大男は歡喜の表情を浮かべ両手を広げる。おい、抱き付かれるのは勘弁だぞ……俺は更に数歩下がる。

「んう……やかましいぞ、サタン……ん？」

その時、シルビアが目を覚ました。

彼女は目の前にいる大男の存在に気が付くと、身体を硬直させて瞳を見開いた。

「だ、誰だ……この大きいのは？」

「失礼した。申し遅れてしまったが、わたしはカイク。カイク〃オランダだ。昔は傭兵をしていたが、今はただの剣士をしている」

「俺は一流魔法使いのサタンだ。で、こっちの赤髪の美しい女性が勇者のシルビアちゃん」

シルビアは状況を上手く飲み込めないのか、キョロキョロと俺とカイクの顔を交互に見ている。

「サタン殿、シルビア殿。短い間だが、世話になる」

カイクはまた深々と頭を下げた。シルビアはよくわかっていないような表情を浮かべていたが、それに合わせてぺこりとお辞儀をする。

「双頭獣は強敵だ。わたしの戦友も……アイツに殺されてしまった」

カイクの瞳に一瞬悲しみの色が滲んだが、すぐにそれは掻き消され、力強くこう言った。

「このままではいずれ、街にまであいつは足を延ばすことだろう。その前に何が何でも討伐しなくてはならない」

彼は何かを決意したかのように前を向き、まっすぐと森へと向か

って歩きだした。俺とシルビアもその大きな背中を追い、森へと向かった。

俺達がラウルの森に着いた頃には、既に陽が落ち掛けていて、空は橙と青紫のグラデーションに染められていた。

「夜の森は危険だ。二人共気を付けるんだぞ」

カイムの呼び掛けに俺は「ああ」と頷き、シルビアはいつでも剣が抜けるように右手で剣の柄を握った。

森特有の湿気を含んだ重苦しい空気が肌に纏わり付く。時折遠くで「オオオオオオ……」と狼の遠吠えのようなものが風に乗って聞こえ、その度にびくびくとシルビアが姿勢を低くする。口数も少ないようだし、随分とビビっているようだ。

「大丈夫だよ。いざとなったら俺が守ってあげるから、さ」

そう言って、どさくさに紛れてシルビアの尻へと手を伸ばす。

「どこを触っている!?!」

「じきっ!?!」

シルビアの鉄拳が素早く繰り出され、鈍い音が俺の鳩尾から響く。……うん。やっぱりシルビアはこうでないと。

「ほう。シルビア殿はなかなかいい拳をしているな」

「そうか？ サタンのお陰でだいぶ鍛えられた」

「なるほど。サタン殿がシルビア殿を鍛え上げたのですな……！」

尊敬の眼差しで見つめられるのは悪い気はしないが……違つぞ、カイク。

彼女は俺をサンドバッグに使つて自ら鍛え上げたんだ……。

……あれから一体どのくらいの時間歩いたのだろうか。

俺とカイクはまだしも、シルビアの歩くペースが大分落ちてきていた。疲れからか、地を何匹もの蛇が這っているかのように張り巡らされた木の根に彼女は、幾度となく足を取られてはつまずいて転んでいた。

「今日はもう休みましょう」

それを見兼ねて、声を掛けたのはカイクだった。

「……す、すまない……足を引つ張つてしまつて」

息を切らしながらシルビアが申し訳なさそうに俯いた。しょんぼりとしている彼女にすかさず優しい言葉を掛けようとしたが……

「そんなことはありません。わたしもそろそろ休憩しようと思つていたところですよ。体力を温存しておかないといざ双頭獣と戦闘に

なつても不利になりますからね」

俺とシルビアの間に割り込んできたカイムの無駄にでかい背中のお陰でそれは不可能となった。

出番を奪われた俺は思わずギリっと下唇を噛みしめる。

そんなことは露知らず、カイムは濃紺の腰下げ袋からマッチを取り出した。

そして、段取りよく枯れ枝や枯れ葉を集め火を付ける。無骨な見た目に反して用意周到な男らしい。

「わたしが見張っておこう。サタン殿とシルビア殿は体を休めてください」

「ああ、すまないな」

「……スー」

カイムが見張りを申し出てくれたので俺はそれに甘えることにした。昨日から殆ど寝ていなかったので、流石に疲労感がある。

……言つまでもないが、シルビアは既に横になり眠っていた。

煌々と燃え上がる焚火の紅蓮色をぼんやりと瞳に映しつつ考え事をしているうちに、俺の意識は深い闇の中へと堕ちて行った。

第7話 死闘

目が覚める。

昨日の一件以来、妙に殺気には鋭くなってしまったようだ。

体を起こすと、しかめっ面したカイルと目が合った。

「今起こそうとしたところです。流石ですな、寝ていても殺気を感じ取れるとは」

「おっと、感心している場合じゃないみたいだぜ？」

暗い闇の中で獣の低い唸り声が聞こえる。

……いや、ただの獣の声じゃないな。

地を這うような太い声にずっしりとした鉛のような鈍い声……二つの声が混じり合っている。

それが意味するのは、獣が二頭いるのか、あるいは……

「……双頭獣、か？」

俺はシルビアの肩を揺すり起こす。

流石の彼女も雰囲気を感じたのか、咄嗟に飛び起きて剣の柄に手を伸ばした。

殺気はすぐ背後まで近付いている。しかし、辺りは暗闇に包まれていて正確な居場所までは特定できない。

カイルも自分の身の丈程もある大剣を鞘から静かに引き抜き、息を殺して相手の出方を窺っているようだ。

その時、シルビアの背後で小枝が折れる微かな音がしたのを俺は聞き逃しはしなかった。

「シルビアちゃん！ 伏せろー！！」

闇から飛び出した獣は素早くシルビア目掛けて鋭い爪をきらめかせたが、寸前のところでカイクの大剣が攻撃を受け止める。流石は元傭兵と言うべきか、その動きには隙というものがなかった。

獣は攻撃を回避されるや否や、身を翻して再度闇の中へと消えて息を潜めた。

面倒そうな相手だな……力に俊敏性に知恵までありやがるとは。

「きまずぞ！」

今度は俺の横を獣の攻撃がかすめた。なんとか避けはしたものの、風圧の強さがその威力を物語る。

……どこのどいつだか知らないが、なかなかの難敵を召喚してくれたいだな。

獣は方向転換し、俺の目の前で向き合う形になった。

その姿は一見すると狼のようだったが、身の丈は人間の二倍つてところだろうか。尻尾と頭はそれぞれ二本あり、異様な雰囲気を放っている。整った銀色の毛並みは月光を受けて輝いていた。

「お前が双頭獣だな？ よかろう、遊んでやる！」

俺は右手を掲げる。その右手目掛けて双頭獣はまるで子犬がじゃれ付くかのように飛びかかってきた。

「　っ！！」

ギリギリでそれをかわす。

おいおい……コイツわかっててそこを狙ったのか？　右手封じられちゃったら元も子もないっての！

「危ないっ！　サタン！！」

シルビアの甲高い声が森にこだまする。

双頭獣は身を翻して無理やり方向を変え、再度俺に向かって飛びかかってきた。

間に合わない！

俺は反射的に瞳を強く閉じた。

……それとほぼ同時だっただろうか。

金属音が響き渡り、俺に突き刺さる“はずだった”鋭い牙はいつまで経っても身体を貫くことはなかった。

「油断大敵ですぞ……サタン殿」

さっきのシルビアと同じように俺はカイムの大剣に守られていた。畜生……俺としたことが情けない。

「わたしがアイツの気を引きます！　サタン殿は後方から魔法を放ってください！」

そう言い、カイムは豪快に大剣を振り回し双頭獣を挑発する。

攻撃の対象が俺から逸れた瞬間、すかさず魔法の詠唱に入り右手を高く掲げる。

“ フレイムブリット
火炎弾 ”

幾つかの火球が俺の周りに浮かび上がる。それらは双頭獣目掛けて勢いよく炸裂し、地をも揺るがす爆発音を発した。物凄い土埃が立ち込め、視界を妨げる。

「やったか……!?!」

徐々に晴れていく視界の中心に“ヤツ”の姿はなかった。

「……な、なんだと?」

再度精神を研ぎ澄まそうとした瞬間、顔の横をヒュンという風を切る音が聞こえた。

一呼吸置いて、風圧と共に頬が熱を帯びた。咄嗟に手の平を頬に当てると、ぬるっという感触……俺の頬は血で染まっていた。

「サタン! 大丈夫か!?!」

「サタン殿!?!」

「……来るな!」

俺は駆け寄ろうとしたシルビアとカイムを制止した。一カ所に集まったりなんかしたらそれこそヤツの思うつぼだ。

「また隠れちまう前にアイツの動きを封じない限りは勝機が見えねえな」

「……よし。ここはわたしが!」

カイムが大剣を構えて双頭獣に狙いを付ける。

狙いを定めた瞬間、それは物凄い勢いでヤツの腹に突き立った。

氷は腹を貫通して地面へと突き刺さっている。所謂串刺し状態だ。ヤツは弱りきっていて「クウウン」とか細い声を上げていたが、まだ手足をじたばたとさせて苦痛から逃れようとしていた。

「これでも動いていられるとは……なかなかやるねえ、仔犬ちゃん。じゃあ、とどめはシルビアちゃん宜しく」

「ええっ!?!」

俺とカイムの背後に立ちつくしていたシルビアに突如話しを振る。彼女は驚いて握っていた剣を落としそうになった。うん、予想通りのリアクションだね。

「わ……わかった……!　いくぞ!」

シルビアはゆっくりと腰を落として構えの姿勢をとる。

ライトニングブレイド
“ 雷 撃 刃 ”

青白い雷を纏った剣を振り下ろし、剣先から拡散した雷撃が双頭獣の眉間へと命中する。

ヤツの眉間はパツクリと裂けていて、黒煙がそこから立ち上っていた。流石のアイツもこれは致命傷になったはずだ。

オオオオオオオオ
……………

まるで遠吠えのような最期の呻き声をあげて、ヤツはその場で息絶えた。

第8話 旅立ち

なんとか双頭獣を撃破し、俺達は野営していた場所へと戻り、夜が明けるのを待っていた。

……しかし、あの犬っころ。この俺の端正すぎる顔に傷をつけるとは、心底腹立たしい。

つーか、俺の鉄壁の防御が崩されたことが心底悔しい。

「サタンもちゃんと血が流れるんだな」

眉間にしわを寄せて目を伏せていた俺に、シルビアが悪戯な笑みをこぼす。

おいおい、俺は魔王なんかかつつの!! …… って、俺は魔王なのか。血も涙もない魔王だ。そう思われてもおかしくはない。

「強いから、何があっても無敵なのだと思っていた」

そう言っつて、俺の頬に出来た傷にアルコールを染み込ませた綿でぼんぼんと消毒し始める。本当は回復呪文を使えばこの程度の傷なら一発だったが、シチュエーション的になかなか美味しいし、黙っておこう。

ちなみに、簡易的な物ではあったが、救急セットはカイクが持ち合わせていた。つくづく用意周到な男だ。

シルビアは、消毒が終わると手際よくガーゼをテープで止めていった。

「出来たぞ」

バチンと傷口を手の平で叩かれた。女の子らしいところもあるんだなあって感心したところだというのにこの仕打ちである。……でも、そんなガサツな一面も大好きだ！

「ありがとうシルビアちゃん。お礼に熱い口付けを……」
「いらん」

シルビアは俺にくるりと背を向けて座り込み、剣の手入れを始めた。きつと、照れてるんだろうなあ。うん。

「今日は助けられた。本当に感謝している」

満面の笑みを浮かべてカイクが俺の傍へと近寄ってくる。昼間の一件がフラッシュバックして俺は数歩下がった。

「サタン殿は今後どうされるのです？」

「今後、か。そうだな……」

結局双頭獣は倒したものの、何も掴むことは出来なかった。

誰がああ魔物を召喚したのが気になる。魔界に戻って確かめる方法もあるが……何故だろう。真実を知ろうとするほど胸騒ぎを感じる。それに、俺はシルビアから離れてはいけないような気がしたんだ。

「勇者様任せ……かな」

そう言って剣の手入れに没頭しているシルビアの背中に目をやった。カイクは「なるほど」と頷く。

「カイムはどうするんだ？ さっきの戦闘で相当腕が立つと見たが」
「ははは、サタン殿、またまたご謙遜を……」

そう言って、彼は苦笑する。そして、遠くを見つめながらこう続けた。

「わたしはコルデスの街で雇われている剣士なので、今後あの街を魔物から守っていきますよ。アイオンの分まで、わたしが頑張らなくてはな」

「アイオンって奴と一緒にコルデスで雇われていたのか？」

「ええ。彼は昔からの戦友であり親友でした。話すと長くなるので多くは語りませんが……彼は双頭獣との戦闘でわたしを庇って亡くなったんです」

「そうだったのか……変なことを聞いたな。すまない」

「いいえ、謝ることはありません。いつまでも悲しんではいられませんが……アイオンに怒られてしまっ」

カイムは闇を照らしている焚火の赤色に対し、眩しそうに目を細めた。

……いや、そういう理由で目を細めたんじゃない。よく見ると彼の目からは涙が一筋流れ出ていた。

「さて、そろそろ休みましょうか」

炎から目を逸らさないまま彼はそう言った。

「ああ、そうだな。シルビアちゃんもそろそろ休もうぜ」

「……スー」

……………。

何となくそんな気はしていた。

翌朝。

朝日が木々の隙間からいく筋も射し込んでいる。

その白いヴェールの眩しさに俺は思わず目を伏せた。

夜の漆黒に染められた森からは想像も出来ないような淡い緑色が一面に広がっている。

そんな木々達に見送られる中、俺達とカイムはそれぞれの旅路を進めた。

カイムとの別れ際「これは、お礼です。受け取ってください」と、彼から金色の飾りと紅い宝石が施された首飾りを手渡された。飾りは拳くらいの大きさをしている。施されている血のような色をした小さな宝石の名前が気になったが……そんなことよりもさっきまでカイムが装着していたからか首飾りが生温かったのと、受け渡す時に掴まれた両手をなかなか離してくれなかったことが気になって、どうでもよくなってしまうた。

カイムは俺達とは逆方向の道へと進み、コルデスの街へと戻って行った。何度も何度も振り返っては笑顔で大きく手を振っている。苦笑しつつそれに応え、俺達も進むべき道を歩みだした。

俺達はとりあえず「火纏樹」ほていじゆが生い茂っているとされる集落へと向かってみることにした。

……とは言っても、勇者様は俺の背中ですやすやと寝息を立てているので決めたのは俺の独断なんだけだな。

「……うー……サタン……」

シルビアが寝言で俺の名を呼んでいる。一体どんな夢見てるんだろつか。あんな夢か？ ……それとも、こんな夢なのか！？ やーん、シルビアちゃんったらエッチ！

「……お前のあばら骨……案外脆いんだな……楽勝だ……」

俺は寝言の後半は敢えて聞かなかったことにし、背中に当たっている柔らかい感触を楽しみつつ足を進めた。

外伝 二人の傭兵（1）

わたしの故郷、フローズンビレッジ。

常に大地には深々と雪が降り積もり、白一色に染められている。

「今日は一段と冷えるな」

手と鼻の頭を真っ赤に染めつつ、アイオーンは手の平に白い息を吹き掛ける。

彼の肩に付くくらい銀髪と透き通るような白い肌は、雪景色に今にも溶け込んでしまいそうだった。

それとは対照的な漆黒の髪を腰の辺りで揺らしつつ、わたしは歩き慣れた並木道を歩く。

その時、急な突風に粉雪が宙を舞い、寒さを防ぐために羽織っていた毛皮のマントがバサバサとなびいた。

「くうーっ、寒い！ 早くポルタさんの手料理食いてえー！」

身震いしながらアイオーンが叫ぶ。

週に一度、わたしの家に彼を招待し、夕飯を共に食べるのが習慣になっている。

今日はその日なのだ。

「ポルタ、戻ったぞ」

ドアを開けると、ミルクのようなチーズのような……なんとも言えない濃厚な香りが鼻腔を刺激する。今日はシチューだろうか？

「……………ポルタ？ どこに行ったのだ？」
「どうしたんだい？」

玄関で身体に付いた雪を払いながら、首だけこちらに向けてアイオーンが尋ねる。

「ポルタが見当たらない」
「なんだって!？」

わたしの妻　ポルタは、普段わたしが仕事から帰ると真っ先に玄関まで来て「お帰りなさい」と挨拶をしてくれていた。しかし、おかしなことに今日は姿さえ見えない。

キッチンでは鍋が火に掛けられて、コトコトと音を立てながら湯気を放っている。外出しているわけではなさそうだ。

「ポルタ……………？」

部屋を見渡すと、洗面所へと続くドアが開けっ放しになっているのに気が付く。
洗面所を覗くと、ポルタが洗面台に顔を突っ伏してぐったりとしていた。

「ポルタ！　大丈夫か!？」

わたしは驚いて妻に駆け寄り、背中を擦った。

「あなた……お帰りなさい。玄関まで行けなくてごめんなさいね」
「一体どうしたのだ？ 顔色が悪いではないか……」

ポルタはずいぶんと青白い顔をしていた。対照的な臙脂色えんじいろのセーターを着ていたからか、余計にその顔色は目立って見える。ダークブラウンの長髪も普段より幾分か艶がないように感じた。
時折「うう……」と苦しそうに呻き、口元を手で押さえている。どうやら吐き気があるようだ。

「カイク、ポルタさんは見つかったのか？」

アイオーンが洗面所の入り口からわたし達の様子を伺う。ポルタの顔色を見て、彼もまた目を丸くした。

「具合が悪いのかい！？ 大変だ……すぐ医者を呼ぼう！」
「だ、大丈夫なのよ……アイオーン」

妻は走り出そうとしたアイオーンの腕を掴み制止する。

「この体調不良は、とても幸せなことなの」

妻の不可解な一言にわたしとアイオーンは啞然とする。

「幸せ……？ それは一体どういう事なんだ？」

わたしのあつけにとられた様子を見た妻は、恥ずかしそうに目を伏せて、頬を薄紅色に染めつつ小さな声でこつ言った。

「出来たのよ……赤ちゃん」

な、な、な、なんと！

わたしは感激のあまり声が出ないまま、涙を浮かべて妻の両手ががっしりと掴み、ぶんぶんと上下に振った。

妻は「痛い、痛いわ、あなた」と言いつつも幸せそうに微笑み、アイオーンはそんなわたし達の様子を見て「やるなあ、カイクム」とニヤニヤと笑っていた。

幸せだった。今のわたしには、暖炉のパチパチという火のはぜる音でさえも我々を祝福してくれているかのように聞こえる。

今日食べた妻特製の仔ウサギのシチューは一段と美味しく感じた。この味をきつとわたしは忘れることはないのだろう。

その日から、数ヶ月の月日が流れた。

妻のお腹は大きく膨らみ、宿った命が順調に育っているということを主張する。

「では、そろそろ行ってくる」

「あなた……」

暖炉の前で椅子に座り、お腹を撫でていた妻が立ち上がり、不安

な声を上げる。

「大丈夫だ。必ず戻ってくる」

「……信じているわ……でも……」

仕事へ向かおうとすると、毎日妻が涙を流すようになった。今日もわたしの腕の中で、小さく肩を震わせている。

わたしの仕事は所謂“傭兵”だった。

人を殺めることだって勿論ある。裏を返せば、いつ命を奪われてもおかしくはなかった。戦争とはそういうものだ。

妻は暫く嗚咽を漏らしていたが、意を決したかのようにわたしの腕の中から抜け出た。

瞼が赤く腫れ上がっている。唇を噛み締めたのか、口角にはうっすらと血液が見え隠れしていた。

ここまで妻が泣くことがあっただろうか……。

もしかしたら、彼女は気付いていたのかもしれない。

外伝 二人の傭兵（2）

「……なあ、カイク」

戦地へと向かう馬車の中で、アイオーンは声を潜めつつわたしに話し掛ける。

彼もまた、わたしと同じ傭兵だった。

「今日の戦は敵兵に魔法部隊が多いそうだ」

「話は聞いている」

「ならば……！」

アイオーンが声を荒げる。わたしは彼に手の平を向け、首を横に振った。

彼が続けようとした言葉は手に取るようにわかっていた。

「わたしはこの仕事に誇りを持っている」

「あんなあ……お前は家族と戦、どっちが大切だっただんだ!？」

「どちらもだ。だから戦で生き残り、必ず家族の元へと戻る。それだけだ」

「……」

一拍置いて、彼は馬車の床を拳でドンと殴りつけた。

数週間後、我々を乗せた馬車は戦場へと到着した。

戦場では雷鳴が轟き、腹の底まで響くかのような爆発音が響き渡っていた。

爆発音が響く度に地面が小刻みに震動する。それは、炎系の上位魔法“エクストラージョン大爆発”の威力を誇示していた。

我々傭兵の戦闘配置は最前線。つまりは、敵陣の前線で兵を魔法で一掃する役割を果たしている魔法部隊との戦闘を強いられることになる。

「上位魔法……噂には聞いていたが、なんて強さなんだ……！」

「これじゃ迂闊に近付けない……こんな奴らと戦えって言うのか！？」

「お……俺は降りるぞ……」

ひとり、またひとりと傭兵が踵を返して逃げ出していく。

そんな奴らを横目で見ながら、わたしは背中の鞘から大剣を引き抜いた。

「カイク……」

わたしの様子を見て、アイオンが声を掛ける。

「お前も降りろ」

「何を言うのだ、アイオン。戦場で傭兵が逃げ出すなんて……それがどれ程愚かな行為か、お前もよくわかっているだろう」

「それはわかっている。だが、この戦……俺達傭兵はどう見ても「ここは戦場だ。無駄話などしていると命を落とすぞ！」

わたしは彼の言葉が言い終わる手前、最前線へと向かい力強く駆

け出していた。

最前線では所々炎が燃え広がっていた。

火の粉が飛び散り、黒煙が視界を遮る。

足元には何人も仲間の傭兵が黒こげの遺体となってゴロゴロと転がっていた。

その時、ゴオッと目の前で大きな火柱が立ち上る。

わたしはすかさず大剣を自身の前で構え、防御の姿勢を取る。髪が少し焦げたのか、ちりちりと嫌な臭いを放った。

安心したのも束の間、今度は耳をつんざくようなけたたましい雷鳴が響き“雷撃”サンダーボルトが左腕に炸裂した。鋭い痛みと痺れに思わず「ぐう……」と呻く。

「カイム！」

アイオーンが駆け寄り、わたしの腕を掴む。そして傷口に手をかざして“治療”ヒールを唱える。

彼は所謂「魔法剣士」であり、殆どの下位魔法をマスターしていた。

「あの程度の魔法避けられないなんて、お前らしくもない……もし迷いがあるのなら」

「迷ってなどいない！！」

わたしはがむしゃらに大剣を振り回しながら炎の壁や雷の雨を掻い潜り、魔法部隊に斬りかかる。

無我夢中だった。迷っていた心を掻き消すかのように、夢中で敵兵を殺めた。

大剣や手足、身体、顔、返り血で全てが紅く染まっていく。

「わたしは……勝たなくてはならない……!!」

“ 紅蓮炎纏刃 ”

炎を纏った大剣で目の前にいた敵兵を数人まとめて薙ぎ払う。粗方付近にいた敵兵は倒したようだ。

わたしは肩で息をしつつ辺りを眺めた。これだけ敵兵を殺めたというのに、次から次へと魔法兵が押し寄せて来ている。

「どうやら、聖の属性の上級魔法を使えるヤツが紛れてるみたいだな」

アイオンがレイピアに付着した血液を払うかのように切っ先を勢いよく振るいながら、そう漏らした。

「蘇生魔法であいつら……何度でも、何人でも蘇るぞ」

「なんだと!? それでは勝ち目など……!!」

「だから言っているだろう……この戦では傭兵など所詮『捨て駒』だ。単なる時間稼ぎでしかない」

「そんな……!!」

「だから、こんな戦……」

アイオンの言葉は大きな爆発音で遮られた。
まるで、スローモーションのようだった。ふわりと身体が紅蓮色
の世界を舞い、猛烈な痛みが全身を襲う。

最後に耳にしたのは戦友の悲鳴。

わたしの意識はそこでブツリと途切れた ……。

外伝 二人の傭兵(3)

次に目覚めたのは見知らぬ部屋の一角、ベッドの上だった。

身体を起こすと節々が激しく痛んだ。

その痛みが、どのくらい長い時間眠っていたのかを物語る。

「えっ！？ 嘘！？ 起きた！ 起きてる！！！」

声が出た方向に視線を移すと、腰ほどまであるプラチナブランドの髪を頭上で一つに括り、橙色の瞳を真ん丸と輝かせ、修道女の黒い衣装を身に纏った、年齢十五、六の少女が佇んでいた。

「良かったあああ…… “^{ピトル}治療” がちゃんと効いたようね。このまま目覚めなかったらまた街の人に『似非修道女』って罵声を浴びせられるところだったわ」

少女は安堵のため息をついたかと思うと、嬉しそうにわたしの方に駆け寄ってきた。

「貴方ねえ、あと一步で三途の川渡っちゃうところだったのよ！ 血が色んなところからドクドクだったし、皮膚だってデロデロで大火傷だったんだから！ あのイケメンなお兄さんに感謝することね」

彼女はわたしの寝ているベッドの縁に腰を下ろし、人差し指を唇に当てながら話す。

……む。そうか わたしは確か戦場で魔法の直撃を受けたのだ。どうやら、危ないところを助けられたようだな。

「そつだ……！ 銀髪の男を見なかったか！？」
「銀髪？ 貴方、何も覚えていないのね」

彼女は「ま、無理もないかー」と言つてやれやれといった動作をした。

「貴方はその銀髪のイケメンなお兄さんに助けられたのよ！ 彼もドクドクでデロデロで今にも死んじゃいそうだったのに…… 必死で貴方に“治療”^{ヒール}を唱えながらここまで運んでくれたのよ。貴方をあたしに託したら力尽きちゃったけど」

「な……！ アイオーンがわたしを運んでくれたというのか！？
それで、彼は今無事なのか！？」

「ちよ、ちよ、ちよっと！ 落ち着きなさいよ！」

わたしは思わず彼女の両肩を掴んでしまっていた。慌てて手を離す。

「あのお兄さんも無事よ。でも、まだ意識は戻らないの…… 今は隣の部屋で眠っているわ」

そう言つて、部屋の奥にあるドアを指差した。

思わずベッドから抜け出そうとすると、彼女は「ストップ！」
と言い、わたしの胸をグツと押してベッドへと戻す。

「絶対安静！」

彼女はニコツと微笑み、わたしの腹の上にどさつと腰を下ろす。
その衝撃で傷口に痛みが走り。思わず「ぐぬううう！」と呻き声を上げてしまった。

「失礼ね！ あたしそんなリアクションされる程重たくないわよ！」
「ち、違うのだ……！ ぐふっ!？」

もう一度、お尻でどすんとされる。

「そうそう、あたしはシエリルっていうの。教会で修道女やってるわ」

「わたしはカイクだ。傭兵をしている」

「カイクかあ。貴方一週間も眠っていたのよ。そうそう！ あのイケメンなお兄さんはなんて言うの!？」

シエリルは足をバタつかせて、目をキラキラさせながら尋ねる。
足が動く度に傷口が痛んだが……また怒られてしまいそうだったので何も言わずにグツと堪えた。

「彼はわたしの戦友であり、親友のアイオンと言う。彼も傭兵だ」
「アイオン様かあ」

彼女はまるで林檎のような頬に手をやり、瞳をうつとりとさせてぼーっとしていた。

……自分の世界に入ってしまったようだ。

「……取り込み中すまないが、ここはどこなのだ？」
「うん？ ここはコルデスの街よ。カイクがどこに住んでるのか知らないけど、大きな街だし名前くらいは聞いたことあるんじゃないかしら」

「コルデスの街か……フローズンブリッジからずいぶんと離れてしまったな」

フツと妻の顔が浮かぶ。心配していることだろう……もしかしたら子供も既に生まれているかもしれない。肝心な時に傍にいてやれなかった。ポルタはわたしを恨んでいるだろうか……。

「カイルって雪国出身なのね！……まあ、がつちりした体の割には色が白かったからそんな気はしてたけど……あつ、そろそろアイオン様の治療の時間だわ！」

シエリルはびよこんとわたしの腹の上から床へと飛び降りた。やっと痛みから解放される……。

「じつとしてなさいよね！」

そう言い残し、彼女は部屋から出ていった。

部屋を見渡すと大きな棚に大小様々なヌイグルミが並んでいた。クマにイヌにネコに……なんだこれは？ よくわからない魔物のような生き物のヌイグルミまである。

小さな本棚には本がびっしりと詰まっていた。「修道女の生き方」「シスターとしての十力条」「聖属性の呪文百選」「かつこいい男の心を射抜く100の方法」「回復呪文の唱え方〈初級編〉」……変な本が混じっているような気がしたが、見なかったことにしておこう。

壁にはさつきシエリルが着ていた修道女の衣装が数着掛けてあった。どうやらここはシエリルの部屋らしいな。

「きゃわああああ……！」

！？

突如、隣の部屋からシェリルの絶叫が聞こえる。

「どうした!?!」

驚いてベッドから抜け出し、悲鳴の元へと急ぐ。

ドアを開けると、シェリルがアイオーンに勢いよく抱きついてい
る光景が目に入った。アイオーンは身体が痛むのか顔をしかめて小
さく呻いている。

アイオーンはどうやら無事に意識を取り戻したようだ。

彼はわたしに気付くと、嬉しそうに口元を緩めた。

「ア……アイオーン……!!」

「カ、カイクゴゴ……!!」

思わずシェリルに続き、彼を抱擁する。

「バツカ! 行ってえよ!!」

「ちょ、ちょっとカイクあんたじつとしてなさいって言ったじゃな
い! つーかアイオーン様に触れるなあ!」

「良かった……本当に良かった……!!」

ズキッ

「うぐっ!?!」

いきなり動いたせいか、身体中に激痛が走り思わずうずくまる。

「バカねえ。そんな身体で急に動いたらそうなるに決まってるじゃ
ない……二人共もうしばらく面倒見てあげるから、安静にしてなさ

い！」

シェリルはアイオンから身体を離し、腰に手をやりつつ、強く
そう言い放った。

……確かに、今の状況ではそうしてもらえないのはありがたいこと
だ。

わたし達は素直に彼女の好意に甘えることにした。

外伝 二人の傭兵（4）

目を覚ましてから数ヶ月が過ぎようとしていた。

わたしとアイオンの傷はほぼ完治した。

世話になったお礼と戦闘のリハビリを兼ねて、コルデスの街周辺に出現した魔物を討伐し、その肉を剥ぎ取り食料としてシエリルの元へと届ける。それを繰り返したお陰で、剣を振るう感覚もなんとか取り戻せた。

そこで、わたし達は故郷のフローズンビレッジへと戻ることを決めた。

シエリルは酷く落胆していたが、やがて笑顔を取り戻し「また遊びに来なさいよ！ 絶対だからね！」と言い、我々の背中をバシバシと叩いた。

我々は改めてシエリルへと深く礼を言い、故郷へと向かう馬車へと乗り込んだ。

「……あの日から、随分と月日が流れちゃったな」

アイオンが目を伏せながら呟く。

“あの日”とは、我々が戦場に赴いた日のことだ。

「もうすぐ終戦を迎えることになるだろうし、そろそろ傭兵も潮時だな」

そう言い、彼は口元を綻ばせた。

我々が参戦した解放軍と、敵対していた王国軍。戦力的には王国軍が圧倒的に有利だった。王国軍はもうじき勝利を収めることだろう。即ち、それは彼が言うように終戦を意味する。

「そしたらもう……ポルタさん泣かせるなよ」

ドクンと大きく心臓が高鳴った。きっと、わたしはバツが悪いかのような顔をしていたことだろう。

アイオーンはそんなわたしの目を真っ直ぐに見つめ、話しを続ける。

「彼女は毎日お前の心配をしていた。傭兵なんて命がいくつあっても足りないような仕事だ。いつか、カームがいなくなってしまっ日が来るのではないかと……俺に涙しながら漏らした事もあった。子供を身ごもってからは余計に不安だったんだろうよ。よく一人で泣いている姿を見かけた」

「そう……だったのか」

それは、本来だったら夫の自分が気付いてやらねばならなかった事だ。

妻の思いに今更ながら気が付き、胸が締め付けられる感覚に襲われた。

「……俺は、正直そこまで彼女に愛されてるお前が羨ましかった」
「アイオーン……」

アイオーンは自嘲のような笑みを浮かべ、目を伏せて話しを続ける。

「魔法の直撃を受けた時、お前だけは絶対に生かさなければいけないって思ったよ」

「そうか……すまなかったな」

敢えて、理由は尋ねなかった。

アイオーンは長年の親友だ。言いたいことはある程度手取るようにわかる。

彼はきつと、ポルタをこれ以上悲しませないように配慮してくれていたのだろう。

あの時も負け戦だという事を知っていた上で、傭兵としての誇りを貫こうと意地になっていたわたしを必死に降ろそうとしてくれた。

「村に帰ったらお前もついに父親かあ。しっかりと頑張れよな！」
「ああ……勿論だ！」

かっぱかっぱと馬の蹄音を一定に響かせつつ、馬車は軋みながらもゆっくりと着実に故郷へと向かって行く。

数週間後、馬車はフロースンビレッジへと到着した。

そこは相変わらず、深々と雪が降りしきっている。我々はそれぞれの家へと足早に向かった。

「ポルタ、戻ったぞ」

玄関で身体に付いた雪を払い、ギィ　と立て付けの悪いドアを開く。

妻は暖炉の前の椅子に座っていた。

腕には、毛布に包まれた赤子が抱かれている。

「あなた……」

「ポルタ、すまなかった……心配しただろう」

妻は赤子を揺り籠へと寝かせ、目を大きくさせてわたしの元へと駆け出す。

「ポル……がはっ!?!?」

ゴツつと顎に衝撃が走る。気付けばわたしは妻に殴られていた。

「心配したなんてレベルじゃないわよ……!!」

その語尾は震えている。

妻の憤慨した表情は徐々に泣き顔へと変化し、潤んだ瞳の端からはポロポロといくつもの大粒の涙がこぼれ落ちていった。

わたしはそれを一粒指ですくい上げて、そつと妻を抱き締める。

「ずっと待ってた……信じてた。お帰りなさい……あなた」

「ああ……ただいま」

「……あなた、パパになったのよ……ほら」

そう言って、妻はわたしの手を引き、揺り籠の傍へと引導する。

「私達の娘、カレンよ」

「カレン、か……良い名だ」

カレンは揺り籠の中で小さな手足を懸命に動かしていた。柔らかかなダークブラウンの髪、白い肌、長い睫毛、大きな瞳。それは、まるで……

「まるで、ポルタの生まれ変わりのようだ……」

わたしは、慣れない手つきでカレンを抱き寄せる。

その愛おしい命は、自分が思っていた以上に温かかった。思わず顔がほころぶ。

「カレン、パパだぞ」

カレンはぼんやりとわたしの顔を見つめていたが、やがて、顔をしかめ出したと思ったら大きな声で泣き出してしまった。

「き、き、嫌われてしまったのか……わたしは!?!」

「ふふふ、お腹が空いたのかしらね」

妻はカレンをそつと膝の上へと移し、授乳をし始める。

そこにあつたのは、幸せな家族の光景。

傭兵をしていた頃には想像も付かなかった幸せがあつた。

命とは、こんなに温かくて、愛おしいものだったのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6218y/>

魔王様の大冒険

2011年12月7日08時56分発行